動詞「違う」の文法化

原田幸一（淑徳大学）

キーワード：　違う，広義文法化，一方向仮説，意味の抽象化，音韻の縮約

文法化（grammaticalization）は，典型的には「自立性をもった語彙項目が付属語となって，文法機能をになうようになる」（大堀 2005）変化と定義できる。しかし，近年，元々は自立性を持 たなくとも，一つの形式が多くの機能を担うようになる多機能化や語用論的な標識（pragmatic markers）の発達なども文法化の視野に含める立場からの，より広い意味での文法化研究が進めら れている（Traugott 1995 など）。本研究は，この「広義文法化」の立場から，動詞「違う」のバ リエーションを文法化理論と関連づけることを試みた。

本研究では，動詞「違う」のバリエーションを確認するために原田（2015）を参照する。原田（2015）は，首都圏を生育地とする若年層による日常会話（2009 年と 2010 年に収集）をデータとし，動詞「違う」の共時的バリエーションを分析している。

原田（2015）を参照し，動詞「違う」のバリエーションを以下の表にまとめる。

表 1　動詞「違う」のバリエーション

用法	＜差異＞	＜否定＞	＜話題維持＞
特徴	「異なる」という意味を示す	「そうじゃない」という意味を示す	話題を維持する機能を担う
作用域	文レベル	談話レベル	談話レベル
意味	有	有	無
音韻	「ちが・ちゃ」無	「ちが・ちゃ」有	「ちが・ちゃ」有

表 1 では＜差異＞→＜否定＞→＜話題維持＞と用法が拡張したと考えられる。表 1 によれば，動詞「違う」は語彙的意味・論理的意味を示す＜差異＞＜否定＞から，意味を示さず話題を維持 するという談話機能を強めた＜話題維持＞へと拡張したと考えられるため，意味が抽象化したと 言える。また，＜差異＞では縮約形が見られない一方で，＜否定＞＜話題維持＞では縮約形が見 られた。更に，＜否定＞の縮約率より＜話題維持＞の縮約率のほうが高かった。これらのことか ら，用法の拡張に伴い音韻の縮約が起こったと言える。意味が抽象化し，それに伴い音韻が縮約 したと考えられるため，広義文法化の立場から，動詞「違う」は文法化の一事例として認められよう。

参考文献

原田幸一 (2015 印刷中) 首都圏若年層の日常会話における「違う」の使用—新形式「ちが・ちゃ」に注目して—　社会言語科学，17(2)

大堀壽夫 (2005) 日本語の文法化研究にあたって—概観と理論的課題—　日本語の研究，1(3).

Traugott, Elizabeth C. (1995) The role of the development of discourse markers in a theory of grammaticalization. Paper given at the International Conference on Historical Linguistics 12, Manchester.